

○川田江美 小野桜子 羽成輝美 板垣昌子 桑村典子
(昭和学院短大)

「目的」高齢化が急速に進行し大きな社会問題となっている今、未来を担う学生たちにとって福祉に関する課題は重要であり、個々が積極的に考え行動していかなくてはならない問題である。そこで短大生の持つ福祉観を探るとともに、福祉観形成に影響を及ぼしている要因を明らかにし、家庭科教育との関わりについて検討した。

「調査方法」東京近郊の短大生 234 名を対象として高齢者との関わり・福祉観・高齢者のイメージ等についてアンケート調査を行った。家庭科教員養成課程の学生に対しては家庭科における福祉の必要性、指導内容などについての項目も加えて調査を行った。調査時期は 1999.10 月～2000.1 月である。

「結果」短大生の福祉観・高齢者イメージは過去の高齢者との関わり方によって異なり、特に教員養成課程の学生が必修で行う介護等体験の影響が大きい事がわかった。高齢者と接することで高齢者の現状を正しく理解し、加齢に伴うマイナス面のみでなく、プラス面も感じとることにより、イメージに大きな変容を与えることが明らかとなった。また家庭科教員養成課程の学生は家庭科の独自性を理解しているので、介護等体験の必要性を強く感じていることがわかった。

若い世代が福祉を理解しノーマライゼーションや共生などの福祉観を構築するために学校教育(家庭科教育)の果たす役割は大きいと考える。この調査から家庭科の学習内容に、介護等体験のような実際に高齢者や障害者に接する機会を取り入れる必要性が認められた。